

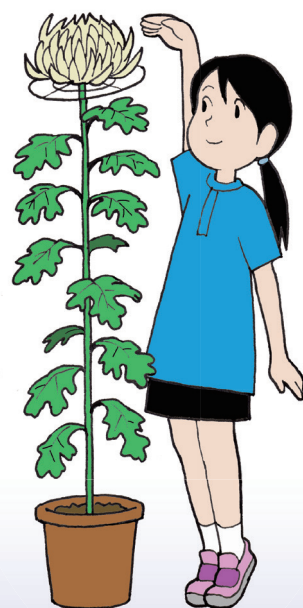
おいでよ

こらぼ

平成 29 年

秋

教室・講座、やりたいことを実現！



- ・特集 シニア世代 地域活動に“初めの一步” 2
- ・地域力ここにあり “第七回汐風まつり開催に当たり” 4
- ・地域で進む連携と協働 ―自主学习支援会― 5
- ・こらぼ大森を使ってみました！ ―大森東デジカメ・ビデオクラブ― 6
- ・第14回こらぼ大森夏まつり開催の御礼 7
- ・こらぼ大森秋のイベントで案内 8

シニア世代 地域活動に“初めの一步”

豊かな人生経験に裏づけられたシニア世代の「知恵」は、今や地域活動を支える重要な柱です。また、地域活動に参加されるシニア世代の皆さんにお話を伺うと澁刺としたものを感じることがあります。その一方で、第一線を退かれた後、地域の活動に関心を持っていてもなかなかきっかけがつかめないとの声も聞きます。そこで今回は、こらぼ大森でボランティア活動をして下さっているシニア世代のお二人をご紹介します。

■趣味の仲間と一緒にボランティア活動に参加

(井上 修二さん メイジャマクレ・大田 事務局)

井上さんは、シニア世代を中心にした「ソフトボールチーム-メイジャマクレ・大田」に参加して8年が経ちます。参加したきっかけは、野球観戦が趣味の会社の同僚からのちょっとした声掛けでした。子どもの頃は戦後の物不足ため、今のようにグローブを各自で手にして満足に遊べる時代ではなかったとおっしゃいます。「この歳になり、ユニフォームを着てソフトボールを楽しめる嬉しさは、一緒に活動する仲間も同じだと思います」と話します。



▲三角ベースボール
(こらぼ夏まつりにて)

活動は、健康づくりと仲間づくりをモットーにしたソフトボールが中心ですが、近年はメンバーの有志によるボランティア活動も行っています。そのひとつが、ボール遊びの楽しさを孫世代の子ども達に伝える三角ベースボール普及活動です。平均年齢72歳の団体なので、体力的な限界はありますが、お金に代えられない、人の役に立てる喜びに目覚める人もいます。「そのような感覚は体験でしかわからないもの」と井上さんは話します。

現在、井上さんはある高齢者施設でご利用者さんと一緒に、今年洪水被害にあわれた地域に送る千羽鶴を折っているそうです。高齢の方々が出来る作業は限られますが、それでも出来ることがあり役立つことと出会えることは大変意義深いとお話になります。このような感覚は会社勤めの時にはなかなか味わえなかったそうです。

メイジャマクレでは、義務感からとは違う地域活動の経験をもっと仲間にも体験してもらえたらと、ボランティア参加の特典として懸賞カードをつくる計画もしています。孫に「おじいちゃんも頑張っているんだと、話が出来れば」と笑顔でお話して下さいました。

■社会とつながることで心と体も元気になります

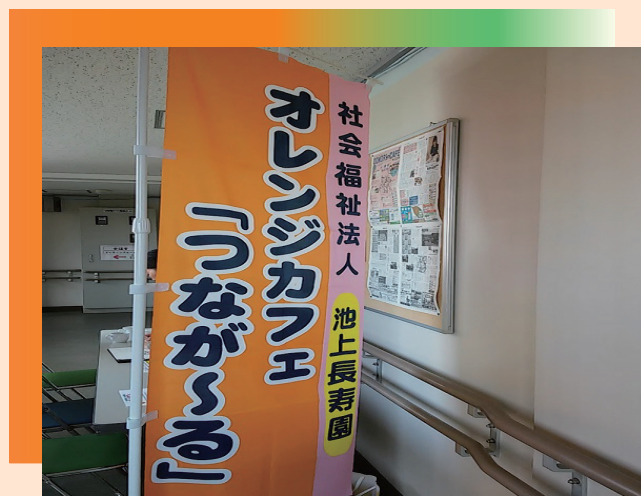
(平野孝子さん 大森在住)

平野さんは、大森にお住まいになり 40 年以上になります。主婦として家事をこなしながら、お仕事を 60 歳過ぎる頃まで続けてこられました。退職後、大病を患ったことがきっかけで、健康づくりにとりかかります。まずは身体を動かすことが大事と考え、昨年こらば大森で開催した「まちの魅力を発見しよう講座」に参加されました。その講座の「街歩き」の途中で急に体調が悪くなり、引き返すことになってしまったのですが、その時のスタッフのサポートに心打たれたそうです。

そのスタッフの声掛けがきっかけとなり、こらば大森を会場にして行われている「オレンジカフェ」（認知症の人と地域住民が気軽に集い交流する場）のお手伝いをするようになりました。億劫になりがちでしたが、外出のきっかけにもなったそうです。なにより、役に立てているという心地よさやボランティアを通じて友人が出来たことで、心が満たされていく感覚を持たれたそうです。



▲菊づくりの方法について受講
(園芸ボランティア講座にて)



▲こらば大森で開催のオレンジカフェ

その後も、健康体操とおしゃべりサロンなどを行うこらば大森健康講座などに参加して、ますますこらば大森が好きになったとお話してくださいました。こらば大森の魅力は、「自然体でいられるところ」と平野さんはおっしゃいます。

最近では、秋に向けての菊づくりを行う園芸ボランティア講座にも参加をして下さいました。「この歳になると出来ることは限られるけれど、椅子を用意してくれるなどして受け入れてくれて嬉しかった」とのこと。講座に参加していた孫と同じ年の高校生たちといろいろ話せたことは、はじめてで貴重な経験だったそうです。

はじめは健康づくりという気持ちから参加しましたが、改めて思い返すと「社会につながりたい」という思いがボランティア活動にふみ出す力になりました。そういう気持ちに答えてくれる場所が地域にもっとたくさんあるといいですね」とお話してくださいました。

第七回夕風まつり開催に当たり

旧東海道大森まちづくり協議会
会長 北山輝夫

江戸時代には品川宿と川崎宿の間にあって、大森は旅人が茶屋で一休みするようになっていました。明治期になってからは毎日縁日が開かれ、夜店には近隣から多くの人を訪れるようになりました。現在ミハラ通りにその面影はありませんが、道の向こう側が見えないほど人出が出て屈指の商店街でした。

子供のころ親から小遣いを貰い、同級生たちと夜遅くまで夜店を回るわくわく感。角を曲がれば知った顔がいて、そこには常に地域の繋がりがありました。港に小エビやシャコを見たこと、海苔摘み体験をさせてもらったこと。その思い出があつてこそ、この地域が好きになりました。



それを今の子供たちに再現してあげたいのです。毎年8月に行われているミハラ通り夜店フェスティバルもそんな趣旨で立ち上げました。今では若い人たちに引き継がれ今年で第25回を数えるにいたりました。夕風祭りは昔賑わっていた東海道の品川と川崎との間の宿としての大森を再現し商店会の活性化に繋げていく計画です。

東京都と大田区から景観整備事業の補助金を支援していただき、小江戸を彷彿させる正面看板、袖看板、瓦の付け庇、前垂れのれんや日よけを統一テーマとして取り付けました。大森本町ミハラ通り北商店会、大森ミハラ通り仲町商店会、ミハラ南商店街振興組合、するがや通り商店会の異なる4商店街から50店舗が参加して1億5千万円の総事業費となりました。2012年4月オープニングセレモニーを開催するまで漕ぎ着けました。そして今年の10月22日で第7回を迎えます。



小学生の大森甚句の踊り、大田区くすのき連の阿波踊り、各商店街の取り組みで各種模擬店、お囃子の演奏、江戸風の指物、人が乗れる蒸気機関車、フリーマーケットそのほかお楽しみ企画満載です。夕風を彷彿させるミハラ通り、するがや通りにぜひお越しください。

地域ですすむ 連携と協働

～地域での連携を活かした学習支援事業～

主に高校進学に向けた経済困窮家庭への学習支援活動に取り組む自主学習支援会は、現在大田区内で6つの教室を運営しています。地域力応援基金ジャンプアップ助成に採択をされたことがきっかけとなり、行政との連携は事業の大きな推進につながっています。

例えば、区立小学校の会場活用、生活福祉課のケースワーカーや民生委員児童委員からの家庭への紹介は、財政や会の運営を支えています。主な受け入れ対象は、経済的困窮にある小中学生としていますが、生活保護受給の家庭もあれば、ひとり親家庭や外国にルーツを持つ家庭など、抱えている背景は様々です。



学習支援のほかに、「世の中ライブ」という課外活動もしています。今年の夏休みには会の「芸術コーディネーター」の協力で、美術館見学をしました。この取り組みは余暇活動としてだけではなく、「自分で見る目を養ってもらう」ための活動と位置付けています。「希望する学校への進学はあくまで結果であり、勉強を通じて『自分で考える力』を身につけてもらいたい。これが、大きい意味での貧困対策につながると思います」と代表の河合良治さんは言います。

自主学習支援会 代表

河合良治 さんのお話より



教室運営においては、「子どもを地域で地域が育てる」を事業の大事なコンセプトにしています。各教室を運営する教室長は、徒歩圏内に住む人生経験豊富な町会関係者など、学習サポーターは、勉強を教えるスキルを持つ近隣に住む大学生が主に担当しています。また、後輩の話し合い手や学習サポーターの補助をするチューター制度があり、卒塾生も教室運営の一角を担っています。それぞれの持ち味が発揮される形で教室が運営されています。

自主学習支援会は、学習支援に関する良いモデルを作り上げてきていますが、今後は大田区の18出張所管内に1教室の展開を構想しているそうです。それに向けて、それぞれの地域の力が十分に発揮されるように地域の中での連携を大事にしていきたいと、河合さんは熱く語っていただきました。